タイ国におけるシロトキコウの記録. シロトキコウ *Ibis cinereus* はジャワ・スマトラ・東マレーシア・カンボジア・ベトナム南部に分布するが、タイ国からは記録がなかった。国立シンガポール大学動物学部所蔵の鳥類標本中にタイ国産雄成鳥の標本 (1930 年 8 月 19 日タイ南部の Setul で採集) が 1 点あるので、この種をタイ国鳥類目録に追加する。マレー半島では、タイ・マレーシアの国境をほぼ境に、北部にインドトキコウ *Ibis leucocephalus* が、南部にシロトキコウが分布するが、両種とも個体数が近年著しく減少している。今回報告した標本は、マレー半島におけるシロトキコウの北限にあたると考えられるので、貴重なものであろう。——森岡弘之・ヤン チャン マン。

Authors' Address: (MORIOKA) Department of Zoology, National Science Museum, Hyakunincho 3-23-1, Shinjuku-ku, Tokyo 169; (YANG) Zoological Reference Collection, National University of Singapore, Kent Ridge, Singapore 0511.

日鳥学誌 38: 150-151, 1990

小笠原諸島におけるモズの繁殖

千 葉 勇 人

小笠原諸島におけるモズ *Lanius bucephalus* の記録は戦前は 1 例もなく (日本鳥学会 1974, 樋口 1986), 戦後は 1988 年 3 月の観察が始めての報告かと思われる (樋口ほか 1988)。これまでに繁殖の記録はない。日本における繁殖地は伊豆諸島では青が島, 南西諸島では屋久島および南・北大東島が南限である (日本鳥学会 1974, 森岡 1987)。著者は 1988 年, 1989 年と 2 年続けて小笠原諸島の父島でモズの繁殖を確認したので報告する。

著者は 1983 年 4 月から父島において継続して観察を行なっているが, 1984 年 11 月 5 日に父島字北袋沢でモズ 1 羽を観察したのが最初である。

1985 年と 1986 年は注意して観察したわけではないので詳しい状況は不明であるが, 夏期に数回観察した。1987 年 3 月には北袋沢で雌雄によるディスプレイをモモタマナの樹上で観察し, 4 月には同一方向のハイビスカスの植込み付近に何度も飛翔する個体を観察したことから, 繁殖の可能性が感じられた。さらに 6 月には, 米島中の大塚豊氏から大根山付近で若鳥らしい個体を見たとの情報を得た。

1988 年 5 月 9 日夕方, 北袋沢で幼鳥らしき個体を見かけたため翌日再度観察に出かけたところ, リュウゼツランの先に雄がいて, ととき声を出すので周囲を見渡したところ, 合計 4 羽の個体を確認できた。そのうち比較的近かった 2 羽は, 明らかに幼鳥であった。当日観察中に, 瀬堀エーブル氏 (小笠原支庁自然公園係) にモズの話をしたところ貴重な情報を得ることができた。まず, 巣の位置を既に確認されており, それを教えて頂いた。営巣木は地面まで枝が密生するガジュマルの独立樹で, 巣は地上 1.6m 程, 樹冠から 1m 弱の枝分かれしているところにあった。また, 隣にあるガジュマルにもほぼ同様の位置に巣がかかっている。昨年使用のものではないかとのことであった。巣材はビロウの繊維が主であった。次に, 5 月始めの連休中, 巣内には無精卵と思われる 1 卵と羽毛のある 4 羽のひながいて, その巣に近づいた際には, 親鳥が低空で飛び出したということである。5 月 9 日現在, 巣内には白地に褐色斑の 1 卵がまだ残っていた。そしてこの日 (瀬堀氏の観察から約一週間後), 巣立ひなと思われる個体を観察したことから, 繁殖に成功したものと考えられる。

1989 年 4 月 5 日, 大平ウオルター氏の情報により, 昨年とほぼ同地点のハイビスカスの植込みに営巣を確認した。巣は地上 1m 程, 樹冠直下であり, 2 羽のひながいた。大平氏の話では昨日までは 4 羽のひながいたそうである。親鳥が盛んに警戒声を発するためにその日はすぐに現場を立ち去った。

翌日ひなを撮影しようとしたが、既に巣立った後だった。確認はできなかったが近くにまだ巣立ひながいるらしく、親はこの時も盛んに警戒声を発していた。また、本年はこのつがいに隣接したテリトリーを持つ別のつがいを2つ観察しているので、それらが繁殖した可能性が十分ある。

1988年と1989年とに繁殖が確認された北袋沢周辺の環境は、八瀬川が流れ、芝を張った広い駐車場と畑、そして手の加わっていないハチジョウススキやギンネムを主とする藪があり、高木のテリハボクやモモタマナが散在し疎林を呈している。

父島では、他の地点でも繁殖をうかがわせる個体や行動を観察することが多くなった。返還後20年を迎え、島の開発が進みモズの好む環境になったことは確かだと思われる。モズは、南・北大東島では1965-1970年頃に定着したと見られていることから(森岡 1987)、今後父島にも定着するものと考えられる。1989年2月には高鳴きするモズ1羽を母島字元地で観察したので、さらに母島への分布の拡大の可能性等興味もたれる。

最後に、本文を書くにあたり情報を提供して下さった大塚豊・瀬堀エーブル・大平ウォルターの諸氏、そしてこの原稿作成の過程で指導して頂いた立教大学の上田恵介氏に対し深く感謝します。

引用文献. 日本鳥学会, 1974. 日本鳥類目録 (改訂5版). 東京, 学習研究社. ●樋口行雄, 1984. 小笠原諸島の鳥類目録, *Strix* 3: 73-87. ●樋口行雄・花輪伸一・小山均・上田恵介, 1988. 母島および父島における冬と春の鳥類の生息状況: ハハジマメグロを中心に. 昭和62年度環境庁委託調査特殊鳥類調査: 17-44. ●森岡弘之, 1987. 小笠原の鳥. 日本の生物 1(2): 30-35.

First Breeding Record of the Bull-headed Shrike from the Ogasawara Islands. Two nests of the Bull-headed Shrike *Lanius bucephalus* were found on Chichijima I. in 1988 and 1989. This is the first breeding record of the species from the Ogasawara Island.—Hayato CHIBA.

Author's address: Miyanohamamichi-Shokujyu 101, Miyanohamamichi, Chichijima, Ogasawara-mura, Tokyo 100-21. 東京都小笠原村父島字宮之浜道 宮之浜道職住 101 号.